

後藤 光明 (ゴトウ ミツアキ)

株式会社ハマキョウレックス社長



品質・サービス面を中心に
日本一の物流企業へ

◆2009年3月期決算概要

(株)ハマキョウレックス取締役副社長 大須賀秀徳

連結の業績は、営業収益791億90百万円（前期比5.2%減）、営業利益41億6百万円（同21.9%増）、経常利益39億45百万円（同26%増）、当期純利益16億74百万円（同12%増）であった。(株)ハマキョウレックス単体では、営業収益は280億15百万円（同5.9%増）、営業利益は26億76百万円（同18.8%増）、経常利益は27億19百万円（同14.6%増）、当期純利益は15億9百万円（同10.6%増）であった。

連結において営業収益は減収であったが、経常利益、当期純利益、共に2期連続の増益、かつ、過去最高であった。(株)ハマキョウレックス単体では、営業収益は17期連続の増収、経常利益は13期連続、当期純利益は11期連続の増益となり、かつ、過去最高となった。

◆セグメント別の収益の推移と概況

まず、貨物自動車運送事業の概況についてであるが、当期の連結での減収の多くが貨物自動車運送事業で発生しており、前期比58億41百万円減となった主因は、子会社、近物レックス(株)の積合収入31億7百万円減である。収支改善努力の結果、同社において55億60百万円のコスト削減の結果、全体では営業利益24百万円増となった。

次に、物流センター事業の概況であるが、前期にオープンしたセンターのフル稼働で8億72百万円、当期にオープンしたセンターの業績寄与で23億12百万円の増収となった。物流センター事業と貨物自動車運送事業の収益の構成比は、物流センター事業が4.2ポイント増加して45.7%の比率となった。

前期は新たに9センターを稼働させており、これにより物流センターの総数は、自社センター 18、借用センター 37、合わせて55センターとなった。今期既に稼働のメドがついている物流センターは2センターである。

◆2010年3月期業績予想

連結では、営業収益810億円、営業利益47億円、経常利益45億円、当期純利益21億円を見込んでいる。(株)ハマキョウレックス単体では、営業収益307億円、営業利益29億円、経常利益30億円、当期純利益17億円を見込んでいる。セグメント別の営業利益は、物流センター事業40億円、貨物自動車運送事業7億円、合計47億円を計画している。

経営指標は、今期の1株当たりの配当金を30円とし、来期は32円を予定している。

中期経営計画では、最終年度2012年3月期は経常利益60億円、経常利益率6%以上を目標としている。

◆近物レックス(株)の業績と予想

当期は、営業収益380億34百万円（前期比12.5%減）、営業損失49百万円、経常損失3億6百万円、当期純損失2億71百万円となり、グループの社内予算に対して未達であった。

今期の業績予想（社内予算）は、営業収益395億72百万円（前期比4%増）、営業利益6億42百万円、経常利益2億80百万円、当期純利益1億26百万円を見込んでいる。

◆近物レックス(株)の現況と経営改善策

近物レックス(株)代表取締役社長 小中章義

当期はグループ傘下で年間フル決算4回目を迎えた。2008年9月の第2四半期決算のころは手応えが感じられたが、それ以降の荷量の大きな落ち込みを乗り越えるところまでは成長していなかったと考えている。

当社の本業は積み合せであり、小口を丹念に集めて丹念に届けるところに最大の利益の源泉があり、そこに

経費と利益を集中させている。当期の通年の取扱金額は前期比12%の下落であるが、下期だけでは15%、1～3月では17%となっている。

不採算なエリア・荷主からの置き換えを行い、運賃単価は2001年、2002年のレベルまで戻っている。主な経費節減は、人件費の12億円減、利用運送料のコスト31億円減である。軽油の価格は通年ではまだ若干高いが、後半は落ち着いてきている。

将来を見通し、それに対応できる財務・輸送体質の実現に取り組んでいる。運送業においては事故の少なさが第一であり、一万分の一を目指している。まだそこには至っていないが、スキャンニングシステムを整備し、全支店長が朝8時までには内容を把握できるようになっている。求められる完ぺきな輸送品質のレベルこそが当社の存立と今後の発展に結び付くという意識を全員で共有し、本来の意味のリストラクチャリングを進めていく。

ドライバーの給料体系については荷量に応じた給料の仕組みを2010年3月期第1四半期中に仕上げ、経費が固定的に掛かることのないようにする。さらに、景気回復の際に出遅れることのないように、輸送能力を確保しておく必要がある。当期の通期の取扱金額は前期比12%の下落ではあるが、ドライバー数は前期比約5%減、総積載可能トン数は同約5%減にとどめる計画をしている。

今期、このような形で、掲げた目標に向かってまい進していく決意である。

◆今後の経営方針

(株)ハマキョウレックス代表取締役社長 後藤光明

日本一の物流会社を目指し、中期経営計画の最終年度では、連結での経常利益を60億円、経常利益率を6%以上とすることを目標として掲げた。現下の経済環境で多くの困難は予想されるが、経常利益60億円は3年目に達成したい。不透明感のある今期の経営のかじ取りは非常に苦しい部分もあるが、設備投資も含めて慎重さを持ちつつも、グループの特徴を生かした経営を進めていく。

- (1) 当期の物流センター数は55となったが、今期は従来からのトレンドとして約10～15のセンターを立ち上げたいと考えている。従来は中部・関東にセンター運営が集中していたが、関西の商圏も広がってきており、全国レベルで内容のある大型案件を獲得したい。不況下では物流合理化のニーズが高まるため、それに沿った形で新規の顧客獲得を実現していく。
- (2) 海外物流では、特に今、生産地から消費地へと変化しつつあるという前提で中国市場を見据え、消費地としての物流を考えたい。生産地としては本年3月からバングラデシュに検品業を立ち上げており、日本国内へ輸出される繊維、靴、カバンといった商材を中心に、海外生産地での対応を計画している。
- (3) 今後の方向としては個別だけでなく、グループ経営を担っている関係会社の収益の拡大も進めて、グループ全体の業績に寄与するように持っていきたい。

◆ 質 疑 応 答 ◆

今期、物流センター事業の営業収益は前期比24億円増収の計画であるが、当期と同じようなイメージでとらえているのか。

現時点での業績は非常に順調であり、また、当期稼働した物流センターがフル寄与する影響を加味すると、対応ができると考えている。

当社の特徴の一つとして、物流センター事業では軽小短薄の商材を扱い、人的な生産性を上げることで他社との差別化をしてきた。当社の扱う主な商材は、繊維製品の Apparel 関係、食品関係、医薬品等であり、この部分に関しては今期も寄与できると考えている。これらについては昨年は円高のメリットを受けた顧客の強みがあり、医薬品は不況に影響される物量の変動が少ない。この3分野は今後のトレンドとして期待でき、大型案件の獲得の可能性も大きい。

近物レックス(株)は、今期、営業収益4%増を見込んでいるが、特に外販において近物レックス(株)の強みはどこにあるのか。

三重、和歌山の紀伊半島は近物レックス(株)としてネットワークの強さがあるエリアである。松本地区も競合の優位性を持ち、東北でも従来からの強さを生かしたエリアがある。こういった大手に勝る配達地域を持っていることが一番の強みである。

中ロットから小口まで、主に中距離に絞り込んでしっかりと丹念に扱うことが当社の得意領域であり、選択

と集中の余地が戦略としてあると考えている。

営業収益4%増という数字は高い目標ではあるが、チャレンジしていきたいと考えている。

近物レックス(株)が仮に今期赤字の場合、減損のリスクもあるのではないか。それに関してどこまで許容するかの議論はあるのか。

減損までの不安を持たれることは当事者として厳しく受け止めることであるが、そのような事態の回避のために全力を尽くす以外にないと考えている。

2年連続のマイナスの数字について当グループとしては、銀行、監査法人等に対し、この計画について議論を積み重ね、納得してもらっている。今の段階ではこの数字が達成できないときには覚悟せざるを得ないかとは思っているが、そのときには新たな抜本的な解決策が求められると考えている。

4月の近物レックス(株)は黒字なのか。

近物レックス(株)においては、目標以上の黒字を出している。また(株)ハマキョウレックス、スーパーレックス(株)も順調な業績が出ており、出だしは好調と言える。

(平成21年5月18日・東京)